



## Quality and Relevance

平成17年7月29日「学術交流に関する一般的覚書」調印

### Prof. Dr.Hans van Ginkel

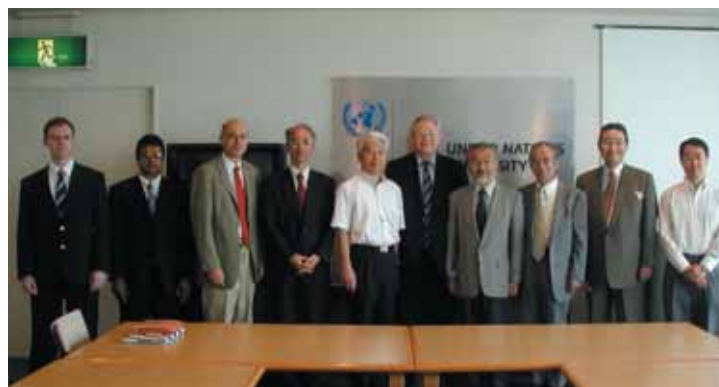
Former Under-Secretary General of the United Nations  
and Rector of the United Nations University (1997-2007) (国際連合大学前学長)

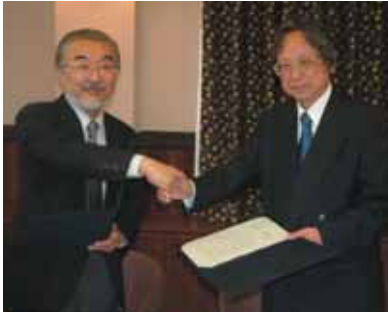
With great pleasure I add my congratulations to all other messages in this Action Report, published at the occasion of completion by Dr. Kazuo Oike of his term as President of Kyoto University. It is characteristic for Dr. Oike that he is honoured by the publication of an Action Report. He steered Kyoto University through a period of momentous change. The “incorporation” of Kyoto University meant more independence, but also more risk and responsibility; a strong need to further enhance quality on a worldwide scale and in particular its relevance worldwide, but also nationally, regionally and locally.

President Oike has performed very well in this difficult period of change. One of his achievements was certainly the strengthening of Kyoto University in the field of disaster reduction. It was in particular in this field that the relations between Kyoto University and different organizations in the UN, in particular also the United Nations University, have become very strong over the past years. The Third World Water Forum in Kyoto, the Tsunami in the Indian Ocean, the Kobe World Summit on Disaster Reduction and the development of the Unesco Unitwin Programme on Landslides, leading to the International Consortium on Landslides (ICL), were all occasions for a deepening of the cooperation between Kyoto University and the UNU.

It is characteristic that right now that I am writing this message, we are close to the Official Opening of the First World Landslide Forum, to be held in UNU, Tokyo, but to a large extent prepared by Kyoto University, in particular by Professor Kyoji Sassa and Professor Kaoru Takara. Indeed, during the Presidency of Professor Kazuo Oike, Kyoto University has taken a lead role in studies related to water and landslides, in studies on risks and disaster reduction, increasing both the quality and the relevance of the academic work in Kyoto University.

President Oike, I sincerely do congratulate you with your achievements! and I do wish you an agreeable and successful continuation of your interesting lifepath!





## 柔軟で壮大な尾池構想

平成17年9月28日「大学間交流に関する覚書」調印

京都市立芸術大学前学長

### 中西 進

尾池先生は俳人でいらっしゃる。そんなことで俳句に関心をもつ私は、以前から先生を存じ上げ、その御作に感銘を受けていた。句集『大地』も書評させていただき、

月蝕の終はりて白き女郎花  
といった句に圧倒されたことがある。この書評の中で尾池句の根幹は「大景との共生」にあると述べた(拙著『詩心一永遠なるものへ』中公新書)。

そこで先生と京大の時計台ラウンジでお茶を飲みながら歓談することになるのも自然なりゆきだった。先生は京都芸大の卒業生の新人の絵をいたく気に入り、その絵をラウンジの壁に飾ってたいそう喜んでおられた。ぜひ見に来てほしいというお誘いも受けて出かけたのであった。

これは先生が京大の総長で私が京都芸大の学長をつとめていた、ごく初期のころだったと思うが、その折から二つの話題が出ていた。一つは京大と京都芸大の間で大学間の交流をしようということ、もう一つは西山文化圏を創ろうということだった。

先にふれた絵のことも、じつはその一つで京大にはない芸術制作の面での有効な交流を望んでおられたのである。私の方も制作のモチベーションがいかにアカデミズムによって正当化されるかに、大いに関心があった、またとくに理工系の科学者、学生とふれ合うことが、いかに制作を刺激するかに、少なからぬ期待をよせていた。

この交流の覚え書き調印は、京大総

長室で行われた。何とこのような交流を国内大学と結ぶことは初めてだといわれ、事の重大さを痛感した。私は着任時から「開かれた大学」を標榜していたから、恭けないことだと肝に銘じた。先生も新しい大学像を目指しておられたから、このような好意を示して下さいだったのである。

もう一つの西山文化圏構想も、お互いに願うところであり、もう一つの機関、国際日本文化研究センターをさそって成就させようということになった。幸いこのセンターは私の旧職場であり、もとより片倉もとこ所長に異存があるはずはない。

しかしこの柔軟な構想が、工学学者でありながら文化的に深い関心と教養をお持ちの尾池先生を中心として推進されたことに、大きな意義がある。

じつは京都芸大が大きな国際シンポジウムを開催した時、開会式につづくパネルディスカッションに先生と片倉先生のお出ましを願ったことがある。

その時にも先生は、京大の桂キャンパスは工学研究科だけだから「ノイズ」がほしいといわれた。私も「ゆらぎ」理論や「散逸構造」論に生かじりの興味をもっていたから、私なりの理解ができ(誤解かもしれない)、幅広い総長を得たことと、旧来の関係から生じた協調とに、大きな幸せを感じたことであった。

先生がシンポジウムのパネルで発言されたことの一つに、京都が豊かな地下水による文化をもつ、ということがあった。

いわれてみるとまことに当然ながら、この爛眼におどろいた。何事にまれ、保水力こそポテンシアルな働きの原動力であろう。この時先生が強調された、科学の目標が「人類の福祉に貢献する」ことだという点も、まさに人間が科学を保水力とすることだと思われる。

三つの機関が力を合わせて西山文化を確立しようという願も、科学という人類福祉の保水力を蓄えることに他ならない。

尾池先生は、そもそも西山は東山に昇る月を見るところだと断言される。この文学的表現がもつ科学的正確さ、ここにこそ、先生の真骨頂がある。

京大桂キャンパスには、お茶室もある。御一緒してお茶を喫したこともある。御一緒に大文字を屋上から見たこともある。西山は月を見るだけの所ではない。茶を喫しつつ東山を見、大文字を見て京都を相対化し、科学を総合学として、人類福祉に貢献しようとする意図が、西山文化圏の構築なのだと思う。

柔軟で壮大な尾池構想に改めて敬意を表したい。

## 伝統の継承と 変革の推進のパートナーとして

平成18年4月10日「連携協力に関する基本協定書」調印

平成19年12月25日「大学院教育における大学間学生交流に関する協定書」調印

早稲田大学総長 **白井 克彦**

京都大学と本学は、2006年4月、大学間の包括協定を締結し、これまで研究・教育・産学官連携・イノベーション創出、国際交流等の分野におきまして、相互にさまざまな連携協力を行ってまいりました。

連携協力の最初のプロジェクトとして始めました〈ホワトナイル〉の共同開発は、その後、発泡酒〈ブルーナイル〉、新ビール〈ルビーナイル〉の開発、販売へと続き、現在も関係者や本学界隈の方たちに大変好評を得ております。本学としまして、両学の知の出会いがこのように形で継続的に社会に還元できることを、大変喜ばしく思っております。

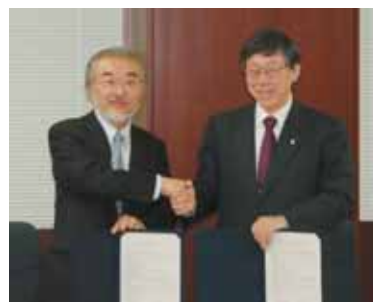
2007年7月には本学創立125周年記念講演会として尾池前総長との対談が実現し、両学の話に留まらず、日本の高等

教育全体の発展と展望について自由に意見交換をすることができました。

「自由の学風」を基調としながらも、時代に応じた変革を推進する京都大学には本学と共通する部分が多いことを実感いたしました。また尾池前総長の教育に関しての高い見識と確固たる教育観には、私だけでなく、参加した学生も大いに刺激を受けたことと存じます。

さらに、2007年12月、京都大学、東京大学、慶應義塾大学と本学の4大学は、大学院学生交流、教育研究面での相互協力の促進と研究水準の更なる向上に寄与するべく、大学院教育における大学間学生交流協定を締結しました。

このように京都大学と本学は、さまざまな交流を通して、既存の枠組みにとらわ



れない自由な教育・研究の展開に向けた取り組みを行ってまいりました。これらが着実な前進をみることでできた背景に、尾池前総長のお人柄と強力なリーダーシップがあったことは言うまでもありません。そのご尽力に多大なる感謝をしております。

尾池前総長のこれからのご活躍と健康を祈念するとともに、京都大学が新しいリーダーのもと、日本、そして世界で更なる飛躍をされること、また本学がともに変革を推進するパートナーとして今後も切磋琢磨できることを、大いに期待しております。

長年、ありがとうございました。心より感謝申し上げます。

## 放射線科学に関する連携協定

平成18年10月2日「研究、教育及び医療の協力に関する協定書」調印

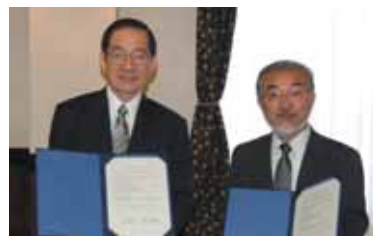
独立行政法人放射線医学総合研究所理事長 **米倉 義晴**

京都大学は、その自由闊達な気風のもとに多くの優れた人材を輩出してきた長い伝統があります。尾池先生は、まさにその京都大学の気風を代表する総長として京都大学を率いてこられました。国立大学の法人化という激動の中で、さまざまな企画によって国立大学の新しい運営を行ってこられたことに深く敬意を表します。

京都大学と放射線医学総合研究所(放医研)は、放射線科学に関する研究、教育、医療の包括的な連携を進める協力協定を2006年10月に締結しました。人類が放射線を積極的に利用し始めてから百年余り、21世紀の社会における放射線の重要性はますます増加すると予想されています。特に医療の分野では、放射線の恩恵なしには現代医学は語れない時代になっています。京都大学は、既に20世紀初頭から放射線科学領域にお

いてわが国のみならず世界の研究拠点としての役割を果たしてこられました。一方、放医研は昭和32年の設立以来、放射線安全・防護と医学利用に関わる研究を行ってきました。今後の放射線科学に求められているのは、医学・生物学から物理・化学・工学まで包含する幅広い学際的研究であり、これを達成するためには異なる領域の専門家の協力が不可欠です。両機関の協力協定の締結は、まさにその出発点となる重要な出来事でした。

国立大学や国立研究機関の法人化によって、効率性を追求するあまり、基盤となる地道な研究がおろそかにされるのではないかと懸念が指摘されています。放射線関連の研究においても、最先端の医療機器や加速器の開発などが脚光を浴びる中で、その基盤を支える基礎研究をしっかりと支えていくことが、次の展開を生む原動力になると確信し



ています。尾池先生の暖かいご支援によって、着実にその成果が実を結びつつあることをうれしく思います。私個人にとっては、母校である大学と研究協力協定を締結させていただいたことは何よりの喜びでした。

放射線を積極的に利用する未来社会において、人々が健康で安全に安心して暮らせる社会を築いて行くにはどうすればよいか、その答えを明らかにすることが求められています。さまざまな技術を駆使した診断器や治療装置の開発によって、放射線をより安全で有効に利用する道が拓かれつつあります。人類がこの便利な道具を安全に使いこなしていくには、最先端の研究を支える地道な努力が必要であり、両機関の連携を軸に国内外における研究協力を積極的に推進していきたいと思っております。

# 京都の伝統と魅力を活かした 産学連携推進

平成19年8月23日「科学技術振興に関する連携協定書」調印

独立行政法人科学技術振興機構顧問

沖村 憲樹

平成17年2月、国立大学法人制度が発足して間もない頃、独立行政法人科学技術振興機構(JST)が主催して、京都で、遠山元文部科学大臣、尾池総長をはじめ、各大学の総長、学長にご出席いただき、「国立大学はどう変わろうとしているのか」との標題のシンポジウムを開催しました。尾池総長は、「京都大学は、昔から、自由な雰囲気の下、産学連携をやってきた。京大の良いところは変えないで、新しい制度の下で、自発的に、新しいスタイルの産学連携を進めたい。」と仰いました。

JSTからみると京都大学との関係は、全国の大学の中でも、最も長く深く円滑に推移してきました。多くの先生に、ERATO、CRESTO、さきがけ等のJSTのファンドをご利用いただき、斯くたる成果をあげていただきました。昨年来、大きな話題になっている山中伸弥先生によるiPS細胞の研究が好例であります。

JSTでは、地域科学技術の振興を最重要施策としてきました。その地域の大学、自治体、企業の科学技術振興施策を黒子になって支えていこうと努力しております。平成16年、京都にも、京都大学工学部桂キャンパスの正面にイノベーションプラザ京都を設置して、京都大学卒業生による最初のベンチャー企業、堀場製作所堀場雅夫会長を総館長に、元京都大学教授松波先生を館長にお迎えして、京都の方々に職員になっていただき、産学連携活動を開始しました。

これを機会に、尾池先生にリーダーシップをとっていただき、平成19年8月に、京都大学、京都市、JSTで、「京都の魅力を創造し、相互に連携協力して各種の科学技術振興施策を展開しよう」との協定を結ばせていただきました。協定の締結は、尾池先生、梶本京都市長(当時)、堀場総館長、松波館長他多くの方がご出席になり、元離宮二条城清流園内香雲亭において、素晴らしい庭園



を眺めながら、テレビも入り、華やかに行われました。その際、京都大学井出亜里教授の「超高解像大型平面入力スキャナーと画像材料推定システムへの応用」研究成果が紹介され、二条城襖絵等京都の貴重な文化財の画像を拝見できたのも懐かしい思い出であります。

この協定の発足により、更に一層JSTのファンドにご協力戴いているのは勿論のこと、JSTからの京都大学への産学連携関係職員や研究のサポート職員の派遣、イノベーションプラザにおける数多くのプロジェクトの推進が円滑に行われて、多くの成果をあげつつあります。これも、尾池先生の推進してくださった産学連携施策の賜であり、深く感謝申し上げます。今後とも、京都地域における産学連携にご尽力下さいますようお願い申し上げます。

# 京都市・京都大学・JSTの連携協定締結

平成19年8月23日「科学技術振興に関する連携協定書」調印

前京都市長 梶本 頼兼

京都は、1200年を超える歴史の中で、先人たちが創造した知的資産の蓄積が文化の豊かさとなり、世界に誇るべき文化財や芸術を育み、進取の気風と創意工夫により、様々なものづくりへと継承されております。

また、京都は、多くの大学が集積し「大学のまち・京都」としての個性を有しております。とりわけ、京都大学におかれましては、多様な研究活動、人材育成、社会連携など京都のまちづくりに大きく貢献していただき、平成11年には京都市の誘致要望を踏まえ「京都大学桂キャンパス」の設置も英断していただきました。

京都市は、京都大学の優れた学術研

究成果を活用した新産業の創出を図るため、その隣接地を世界最高水準の「知的産業創造拠点」とするべく、平成14年に「桂イノベーションパーク構想」を策定し、鋭意整備に取り組んで参りました。その結果、独立行政法人科学技術振興機構の「JSTイノベーションプラザ京都」をはじめ、国関連のベンチャー支援施設や研究開発型企業の集積が図られ、京都地域における科学技術振興の中核として、京都の発展に大きく寄与することとなりました。

こうした状況のもと、平成19年8月、京都大学と独立行政法人科学技術振興機構と京都市との3者による科学技術振興に関する協定を締結いたしましたことは、



これまでの連携を今後も発展的に継続し、地球環境・エネルギー問題への対処など、21世紀の広範なニーズに対応した、最先端の学術研究成果の社会還元に弾みが付くものと期待しております。

京都市においても、京都の持つ強みを生かした地域クラスターの形成に向け、産学公連携の下、全力を傾注しているところであり、今後とも、京都大学をはじめ多くの方々からの御協力をお願い申し上げます。



## 尾池和夫先生ご退任に寄せて

平成19年9月27日「連携協力に関する基本協定書」調印

平成19年12月25日「大学院教育における大学間学生交流に関する協定書」調印

慶應義塾長

### 安西祐一郎

京都大学の第24代総長として、およそ4年10ヶ月にわたってご活躍されました尾池和夫先生の、高等教育界発展に貢献されたご功績とご尽力に対し、心より敬意を表するとともに、謹んで感謝の意を表する次第であります。

1897年に創設された京都大学は、自由の学風を重んじ多数の有為な人材を輩出し、世界でも有数の実績と伝統を誇る国立大学ですが、私立大学の慶應義塾との学風を比較しますと、国立と私立、関西と関東という環境の違いを超えて、自主独立の精神が旺盛という共通の点が多々認められます。このためか、かねてより個々の研究者の間ではいくつもの連携が重ねられ、さまざまな成果が観察されているところ です。

こういった土壌のもとに、京都大学と慶應義塾は、平成19年9月に「連携協定に関する基本協定書」を交わし、平成20年11月には国内外問わず優れた医科学の研究者を表彰する慶應医学賞を京都大学の坂口志文教授に授与し、平成20年12月には、「第1回慶應義塾大学・京都大学 連携記念シンポジウム」を開催するなど、医学、経済学、あるいはスポーツ等を含めましてさまざまな分野において密接にお付き合いさせていただいております。こういったことが、新たなエネルギーを創出できる秘訣であり、相互に交流を深めている源泉であり得るのかもしれない。

慶應義塾の創業者福澤諭吉が好んで使っていた言葉の中に「自我作古（我より古をなす）」という言葉があります。

1868（慶応4）年、慶應義塾の名を定めた『慶應義塾之記』の中で初めて使われたこの言葉は、もともと中国の『宋史』に見られた言葉ですが、たとえ困難や試練が待ち受けていても、「自ら、歴史を創り出す」という勇気と気概を表す信条として、慶應義塾の歩みの中で脈々と受け継がれてきました。

言うまでもなく、尾池先生の総長在任期間というのは、2004年の国立大学法人化という大波が日本の高等教育界に押し寄せた大変な時期と重なっており、その重責を担ったご苦勞は本当に大変なものであったと拝察しております。かつてない大波の中にあっても、京都大学を新生国立大学法人として誕生させ、新しい歴史に向けて勇気ある一歩を踏み出す先鞭をつけられてきた尾池先生は、まさに「自我作古」の精神を具現化した人そのものであったと言えます。その大きな軌跡の存在は今なお日本の高等教育の中にくっきりと浮かび上がっております。尾池先生のご功績は、高潔で温和なお人柄と

ともに、京都大学の「自由の学風」の精神を新たな一世紀へと導いた名総長として、永く記憶に留められるべきことでありましょう。

尾池先生がご退任された2008年は慶應義塾にとりましても、創立150年を迎えた記念すべき年であり、このような節目にあたり尾池先生の長年にわたるご功績をお祝いできますことは偶然とは思えませんし、高等教育界で先生に多くのことを学ばせていただいた者として、大いなる誇りと存じております。

京都大学が、今後ともに尾池先生のご尽力によって築かれてきた方向性をしっかりと引き継いで、参画される全ての関係者の協力によって、教育・研究・医療等々さまざまな活動を通じて社会に貢献され、さらなる歴史を創られていくことを願っております。

末筆ながら、尾池先生のこれまでのご尽力にあらためて敬意を表するとともに、尾池先生のご健康とご多幸、そして引き続きこれまでも増してのご発展を心よりお祈り申し上げます。





## 「京都大学・立命館大学 連携協力に関する基本協定」の 締結をめぐって

平成19年12月21日「連携協力に関する基本協定書」調印

立命館総長 川口 清史

2007年12月、京都大学と私たち立命館大学は学術交流に関する包括協定を締結した。現在はしばしば「大学間競争の時代」と呼ばれる。しかし私の認識はむしろ、個別大学の自己完結の時代が終わり、大学間協力、ネットワークの時代である、というもので、この協定は大変望ましいものであった。立命館大学は、これまでも医科大学との協定はあったが、このような包括的な協定は初めてのことであった。その後、2008年に入って、広島大学、山形大学との協定締結と、国内大学とのネットワークを広げている。

とはいえ、立命館大学にとって京都大学との連携がオーソライズされたことは格別な意味を持つ。立命館の創始は1869年(明治2年)の西園寺公望による私塾立命館の創設にあるが、京都帝国大学の創設を決定したのは時の文部大臣西園寺その人であった。京都帝大創設の実務は彼の秘書中川小十郎が初代書記官として当たるが、その中川が、1900年立命館の前身京都法政学校を創設する。創立当時の京都法政学校は勤労青年を対象にした夜間の学校であったが、教授陣はすべて京都帝大の教授であった。

今日でも、立命館大学に多くの京都大学出身者がいる。彼らの多くが卒業後も京大の研究室、研究者と共同して研究を進めている。その意味で、今回の協定はまさしく両大学の結びつきがオーソライズされたものとして意味を持つ。立命館大学のとりわけ自然科学

分野は、近年急速に力を入れてきたとはいえ、力量的には不十分で、どうしてもいくつかの分野に集中せざるを得ない。そして、私学としての強みを生かす上で、企業や社会と近い応用分野を重点としてきた。基礎研究に厚い蓄積を持つ京都大学との連携は立命館大学の研究をしっかり支えるものになると期待される。また、研究成果を社会につなぐ面において、関西TLOの経験に見られるように、立命館がお役に立てる局面があると考えている。

当面の連携は、京都大学のバイオテクノロジーと立命館大学のロボット技術開発の連携など個別的なプロジェクトから出発するが、より系統的組織的連携を教育面、教員・職員の研修などにも広げて行きたいと期待している。

連携に当たっては学内に慎重な意見もあったのではないかと想像すると

ころであるが、尾池総長、松本研究担当副学長のリーダーシップで実現できたことは、立命館大学にとって大きな喜びであった。出発は小さなものだがこれをじっくりと大きく育てて行きたいと、立命館総長として心中期しているところである。





## 尾池先生「らしさ」への期待

平成19年12月25日「大学院教育における大学間学生交流に関する協定書」調印

東京大学総長

### 小宮山 宏

「東京の学生に、ぜひ京都に来て、都の文化に触れて欲しい。京都の学生は、自由すぎてのんびりしているので、生き馬の目を抜く東京で武者修行して、たくましく育て欲しい」。

これは、京都大学、慶應義塾大学、東京大学、早稲田大学による「大学院教育における大学間学生交流に関する協定書調印式」の記者発表での尾池先生の御発言である。

この通称「4大学コンソーシアム」は、大学院生が、各々の学籍はそのままに、大学の枠を超えて研究指導を受けることが出来るように、大学間学生交流協定を締結したものである。学生たちは、その研究遂行上の事情や希望に応じて、4大学を臨機応変に行き来して、研究指導を受けることが出来るようになった。

これは、同時期に開催されていた「教育再生会議」において、若手研究者・大学院生の流動性を高めることの必要性が議論された際、学生たちが出身大学で、そのまま大学院に進むことを、何がしかの規則を設けて制限しようとする動きがあったことに対し、大学の側が、自ら出した答えであった。規則によって流動性を促進するのではなく、学生の自主性を尊重し、彼らが希望したときにはそれが出来るような道を用意する。いかにも、法人化された大学にふさわしい自主的な取組ではないか。

こうした思いがあって、記者発表でも私はやや大上段にふりかぶって、この協定の意義を強調した。「もっと強い日

本の大学を作るために、大学院生の流動化を」、「学問の融合が進み、強い研究分野が発展する」等々申し上げたのである。一方続いてお話になった尾池先生からの冒頭に掲げた御発言は、逆に地に足をつけて、このコンソーシアムが学生にとってどのようなものであるべきか、大学として期待するものはなにか、学生の立場、大学の立場に立って、述べられたものだった。その本来の趣旨・目的に立ち返って、もうひとつ大事なこと、学生本位、という点を補完してくださったのであった。

尾池先生と私は、それぞれ京大総長、東大総長ということで、マスコミ等において、発言が文字通り並べて紹介されることが多かった。問題意識を共有しつつも、私とは異なった視点や角度からの御発言に接し、はっとした思いを禁

じ得なかったことが懐かしく思い出される。理学者らしい緻密で、現象を的確にとらえた率直な御意見には、物事の全体像をとらえて、構造として理解しようとする私に、常に刺激と、異なる視点とを提供してくださったのである。これからも、そんな尾池先生らしい御発信を楽しみにしている。



## 連携協力の推進を祈念

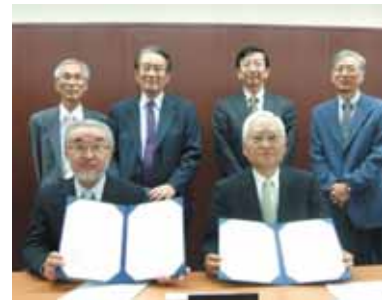
平成20年4月21日「連携協力に関する基本協定書」調印

独立行政法人宇宙航空研究開発機構理事長 **立川 敬二**

古来より日本の中心地のひとつとして発展を続ける京都にあって、自由の学風のもとで基礎学術重視の研究を行い、世界トップレベルの成果を出してきた京都大学。われわれ宇宙航空研究開発機構（JAXA）は、宇宙科学分野を中心に貴学との間でこれまで様々な協力関係を築いてまいりました。貴学におけるさらなる宇宙分野での研究の発展を目指す形で、平成20年4月1日には、貴学に宇宙総合学研究ユニットが設置され、さらに同年4月21日にはJAXAとの機関間の連携協力協定が締結されま

した。尾池前総長におかれては、本協定の成立の過程で並々ならぬご尽力をいただき大変感謝しております。貴学とJAXAの協力関係は、「両機関の力を包括的に生かし、学術研究、教育、宇宙関連技術水準向上及び宇宙開発利用促進を図る」という協定締結の思想を実現するという目的を全うすべく、これからが本当の勝負かと思えます。基礎から応用まで、宇宙理工学から人文社会系学問までを含む融合的・学際的研究である「宇宙総合学」の確立へ向けて、尾池前総長をはじめとする貴

学の皆様とこれまで以上に強固な協力関係を築いていくことを切に念じます。



## 尾池先生とマンガ本

平成20年9月17日「連携協力に関する基本協定書」調印

京都精華大学学長 **島本 洸**

もう2年近くになるのでしょうか。京大本部棟の応接室で初めてお会いし、そのあと時計台下のラトゥールでフランス料理をごちそうしていただいたのは。新聞やテレビなどで顔は拝見していましたが、初めてお会いする尾池総長でした。どのような方だろうかと思像していたのですが、そのままのメディアを通してぼくが想像していたままといいことですが一お人柄でした。話題にことかかず、しかも話が面白い。ユーモアがあり話すことが適切。ついワインがすすんでしまう、そんな場をつくれる方でした。

この出会いのきっかけとなったのは、尾池総長から京都精華大学に「京大を紹介するマンガ本」をつくってもらえないかという依頼があったからです。少し驚いた、というのが正直なところでした。もちろん、マンガ学部をもつぼくたちとしては、マンガ表現のコミュニケーション的可能性の大きさに自信をもっていました

が、京大での専門的研究をマンガで紹介するという事はほとんど考えてきませんでした。精華側だけでなく、多くの京大の先生方も同じようなことだったのではないのでしょうか。尾池総長は常識をあっさりと超えたのです。そして、そうしたことのできる自由なお人柄であることが、最初の出会いでわかったのです。

それから、「MANGA Kyoto University」の制作が始まりました。いろいろな紆余曲折がありながらも、2008年4月に中間発表会を行えるまでに進行し、その年の9月に完成することができました。京都大学の学生・職員と京都精華大学の学生たちとの共同作業です。ぼくたちのマンガ学生たちは取材と作画を通して、実に多くのことを得たと思います。尾池総長は、この本の制作を通して、京大の学生だけでなく、京都精華大学の学生も教育してしまったのでした。それは総長という以上に、人間尾池和夫先生としてのスケールの大きさなのだ

と思います。

完成した「MANGA Kyoto University」の反響は予想をはるかに超え、あわただしく対応に追われる日が続きました。そんなマンガ本の反響がこだまするなか、尾池総長が京大を去られることになりました。ぼくたち精華の者にとっては、反響の音も含めて「MANGA Kyoto University」は先生をお送りするファンファーレとなりました。心より感謝申し上げます。退任後も国際高等研究所のフェローを始めお忙しいでしょうが、再び先生とコラボレーションできればと首を長くしてお待ちしております。

